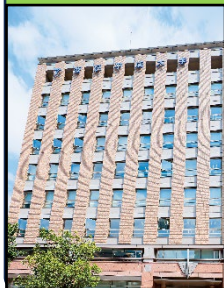


癌化学療法と栄養

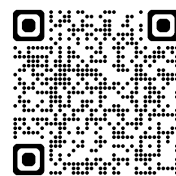


【池袋キャンパス】健康メディカル学部 健康栄養学科 教授

牟田 真理子 Muta Mariko

URL : [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)

キーワード : 癌・化学療法・味覚障害



研究の概要

SDGs 目標 3：すべての人に健康と福祉を

癌化学療法時には様々な副作用が現れるが、その1つである味覚障害は「食べる」ことに直結しており、化学療法時の食欲不振、栄養不良などを招き、患者の生活の質を低下させることに関連する。味覚の変化は抗がん剤やレジメン（治療計画）、個人の体調や取り巻く環境、主観などが関係し、評価は難しい。

我々は味覚変化を点数化するキットを用い、味覚変化の可視化をおこなった。治療レジメン別に味覚変化の傾向を調べ、栄養状態の変化、栄養摂取状況の変化等を分析し、患者の治療効果の向上や生活の質（QOL）の向上に寄与することを目的とする。

化学療法による味覚変化は治療開始早期に現れる傾向があるが、同じレジメンで化学療法をおこなっても人によって味覚変化のパターンは同じではなく個人差が大きい。特徴的には甘味の感度が上がる人が多い傾向が示されている。レジメンの違いによって味覚変化の傾向は異なるが、塩味の感度の低下と栄養摂取量が低下の関係も見受けられる。

栄養状態の指標として血清アルブミン値を比較すると、化学療法中はほとんどの患者が低下するが、レジメンによる違い、味覚変化の違いにより、血清アルブミン値低下の程度も異なる。血清アルブミン値の低下と合わせてエネルギーや栄養素の摂取量も減少している傾向があるため、味覚と栄養摂取量や栄養状態との関連性が示唆される。

レジメン別に味覚変化のパターン分類が明確になり、味覚変化の発現と栄養状態の低下、栄養摂取量の関係が明らかになれば、化学療法中の味覚変化の状態を知ることによって栄養状態や栄養摂取量の低下の予測が可能になり、患者自身が自身の健康管理に役立てることが期待できる。また、医療従事者にとっては化学療法中の食事計画や栄養指導等、患者への理解や治療対応の改善等に活用が期待できる。がん患者の食事調査を活用し、がん患者が特異的に摂取している食物を特定して食生活の面からがん予防に貢献できることも期待できる。

実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

- ・化学療法中の味覚変化別の食事設計が可能になり、変化する味覚を対象にしたレシピ開発等があげられる。味覚変化から栄養摂取の予測が可能になれば、特に低下が予測される栄養素を補強した食品、栄養剤等の病者用食品の開発も考えられる。また、化学療法時の栄養教育のスタンダード化が期待できる。
- ・レジメン、味覚変化別の食事設計が可能になり、患者の QOL 向上が期待できる。
- ・化学療法時の味覚障害の詳細を明らかにすることで、医療従事者の患者へのより適切な対応が期待できる。
- ・患者が自己の味覚変化から健康状態の予測と QOL 低下予防の自己管理が可能になる。

知的財産・論文・学術発表など（詳細は右上 QR コードの教員紹介からご確認ください）

- ・「化学療法による味覚変化の違いについての検討」
- ・「化学療法中の味覚変化と栄養摂取の傾向」
- ・「TC 療法と AC 療法の味覚変化と栄養状態の比較」